

勸懲雜話

103
依 123
22



B1
M10
版教大



翻 刻

文部省御蔵版



勸懲雜話

明治十年六月出版

訓蒙勸懲雜話

目錄

- 第一章 真神
- 第二章 太陽
- 第三章 植物
- 第四章 鳥
- 第五章 世界
- 第六章 真神ハ見
- 第七章 寺院
- 第八章 禮拜



ざるものゝし

目錄

第九章	眞神ハ善人ヲ佑クル事
第十章	良心
第十一章	後悔
第十二章	貧人ルウ井
第十三章	父母
第十四章	父
第十五章	母
第十六章	女子ルウ井ズ
第十七章	士官ジャツク
第十八章	病母

第十九章	兄弟の愛
第二十章	兄弟三人
第二十一章	前章の續
第二十二章	前章の終
第二十三章	近隣を愛する事
第二十四章	仁恵
第二十五章	孤子
第二十六章	ジュリアン
第二十七章	旅客
第二十八章	諸人の必要なる人

第二十九章	善牧師
第三十章	施濟姑娘
第三十一章	報讎
第三十二章	不善の富者
第三十三章	自愛して他を愛せしむ事
第三十四章	家内
第三十五章	老
第三十六章	從僕
第三十七章	朋友
第三十八章	恩

第三十九章	老たるミシエール
第四十章	傲慢
第四十一章	各種の職
第四十二章	裁判
第四十三章	罪人
第四十四章	獄
第四十五章	善良方正の人
第四十六章	三萬ヲ
第四十七章	前章の續
第四十八章	奇託を受くる事

第四十九章	欺く人
第五十章	正しき事
第五十一章	前章の續
第五十二章	職業
第五十三章	賢者
第五十四章	牧人
第五十五章	耕夫
第五十六章	兵卒
第五十七章	商人
第五十八章	前章の續

第五十九章	工人
第六十章	營業
第六十一章	魔を使ふといふ事
第六十二章	節儉と時刻を惜むとの事
第六十三章	富貧
第六十四章	前章の續
第六十五章	眞の富者
第六十六章	ナボッツの葡萄園
第六十七章	前途の目的
第六十八章	善人の葬儀

第六十九章 悪人の死

第六十九章 悪人の死
第六十四章 前年の賭
第六十三章 富貴
第六十二章 諸勅と和歌と詩との事
第六十一章 疾苦の事
第六十章 詩集
五十八年
五十八年

目錄畢

訓蒙勸懲雜話

凡例

一 此書ハ佛國ドラパルム氏ノ原選ニシテ勉メテ勸善懲
惡ヲ旨トシ專ラ幼童脩身ノ階梯トナシ且初學ノ讀本
トスル者ナリ其刊行ハ千八百七十二年ニ係レリ
一 里數ハ總テ之ヲ本邦ノ制ニ譯シ三十六町ヲ以テ一里
トス貨幣ハ原文ニ各種ノ名目ヲ用井タレバー々之ヲ
譯セズ唯原語ヲ記シテ本邦適當ノ量ヲ註ス其前後同
名ノ者ノ如キハ初ニ註シテ後ニ省ケリ
一 人名ハ右傍ニ單柱ヲ附シ地名ハ雙線ヲ施ス原音ヲ記

凡例

シテ其義ヲ註スル者ハ未ダ譯字ノ妥當ナル者ヲ得ザ
ルガ故ナリ

明治八年一月

和田順吉識

訓蒙勸懲雜話

第一一章 眞神

眞神ハ天地宇宙間の萬物を造る者にして大ハ天上の太
陽より小ハ草底の昆蟲ニ至るまで凡そ人の目ニ觸る
物と觸きざる物との論なく皆此神の造きゑにあらざる
ハさく余太陽の昇るを見るハ其形盛大ニして光り輝き
多くの光彩を放てり又暗夜ニ星辰の布き列なれる天を
見れば實ニ砂粒の海岸ニあるが如く甚だ數多かり又風

の起ると暴風雨の至るとを聞き時として又雷聲の余が
耳底に響くことあり
余四序の循環を見らば草木春を以て地に萌芽し夏の温
熱を得て舒長蕃茂し後花を開き實を結び秋に至りて
熟せば人之を收めて冬日の間長く穀倉に充て貯蓄とい
汝著意して見よ彼の太陽と星辰と地の豊饒なると草木
の野に生じて花を開き實を結びと皆盡く真神の力に因
りて創造し又盡く真神の力に因りて保存するあり嗚呼
我真神其妙力の廣大にして事策の善良あること實に敬
畏せざんばあるべからざ

我真神の標せし位置を見るに山岳ハ高く平地ハ低く溪
谷の間は小川を流せしめ諸山より大河を下らしめ且雨
降り露滴りて土地を潤澤ならしむるも皆我真神の爲に
所あり

人類及び諸動物の爲めは草木果蔬を生育して飢寒の禦
となし飢を養ふ麪包渴を止むる葡萄酒も亦もと地より
生産して皆我真神の爲に所あり

第二章 太陽

童子等余に從ひて野の中或ハ山の上に至り首を昂げて
天の盛大あるを觀よ

太陽ハ東の方ニ現きて火の雲ニ包まると如く漸々ニ
昇りて土地を暖め且豊饒ニするあり
太陽の廣大なる地を過ぐるを觀よ其進むニ變ることあ
く常ニ齊しく常ニ同じくして終ニ暮雲の端ニ傾き隠る
るなり
夜間余輩の太陽を見ることを得ざる時も其光輝ハ會て
消ゆることなし余輩ハ其光輝を見ざれども他國の人民
ハ其光輝を見るあり是き其光輝の絶ゆることなく決し
て消えざるが故あり奇なるかを神あるるを眞神通力の
事業驚くべく貴ぶべく實ニ得て知るべからざるあり

不學無術の人あり太陽及び萬物を生育せしる光輝と上地
を豊饒ニする温熱を知り太陽を眞神として造物の主
なりと思ひ首を俯し膝を屈めて之を禮拜然れども太
陽ハ心と造りしものにて即ち眞神の造る所あり
眞神ス若し太陽をくんば宇宙晦冥ならんと思ひ太陽を
創造して之ニ出沒すべき地を示し其進行すべき時間を
算へて其時と分時とを定めたり故ニ世界創造の後數百
年を過ぎても太陽ハ眞神の定法ニ從ひて其現るる時間
を限り正しく時と分時とに適合して曾て誤ることなし
童子等太陽ハ汝ハ眞神の妙力の盛大あることを誨ふる

物なり

第三章 植物

汝ハ小樹の生長と其枝葉と花とを見たり汝何ぞ善く之を考へざるや
汝ハ其一枝を折り其一花を摘みて玩物とを亦何ぞ善く之を考へざるや
童子等姑く汝の意を下して植物ニ感心をべし是を真神の事業の一奇を見らば足るあり
寒氣已ま去り暖風始めて地ハ吹く時葉は包み花を含め
る嫩芽の自肥もを見るべし

此小き嫩芽ハ甚柔軟にして愛まべし真神之を殻中ニ包藏せしむ
蕾の開くとき彩色ある花瓣を見し花底ニ天然緻密なる鬚心を隠し
果物ハ實之より出るなり
花ハ樹木の裝飾とのに見ゆれども其實ハ鬚心の弱きが爲め
之を蓋ふ用をなれなり
花の蓓蕾鬚心等を真神の愛護するに切なること恰も慈母の赤子を保ん
ざる如し赤子始めて生るれば寒氣と猛烈なる空氣とを禦めんが爲
めに之を温暖なる襁褓の内ニ包みて保護し真神の花ニ於けるも一
ニ斯の如し

第四章 鳥

一隻の鳥あり叢樹の地より來りて巢を作どり此鳥甚小弱
よして枝より枝と飛び遷るよ一葉の陰に隠れて見え
此鳥ハ草芽及び白楊花の纖毛と些少なる羊毫とを拾ひ
集め又之を樹苔と共よ編み合せて一の巢を作り陰密な
る小枝の上よりあり
雌鳥此巢中より四五又ハ五六の卵を生む其卵を野薔薇の
實よりも小くして雄鳥の羽色の如き斑點あり天然
此微小なる雌鳥ハ何事よ堪へ忍ぶや二十日の間此巢中
よ止まり動かざして其翼下よ卵を温む時よして小穀粒

勸懲雜話

凡例

一此書ハ佛國ドラパルム氏ノ原選ニシテ勉メテ勸善懲
惡ヲ旨トシ專ラ幼童脩身ノ階梯トナシ且初學ノ讀本
トスル者ナリ其刊行ハ千八百七十二年ニ係レリ
一里數ハ總テ之ヲ本邦ノ制ニ譯シ三十六町ヲ以テ一里
トス貨幣ハ原文ニ各種ノ名目ヲ用ヰタレバ一々之ヲ
譯セズ唯原語ヲ記シテ本邦適當ノ量ヲ註ス其前後同
名ノ者ノ如キハ初ニ註シテ後ニ省ケリ
一人名ハ右傍ニ單柱ヲ附シ地名ハ雙線ヲ施ス原音ヲ記

シテ其義ヲ註スル者ハ未ダ譯字ノ妥當ナル者ヲ得ザ
ルガ故ナリ

明治八年一月

和田順吉識

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

訓蒙勸懲雜話

目錄

- 第十一章 眞神
- 第十二章 太陽
- 第十三章 植物
- 第十四章 鳥
- 第十五章 世界
- 第十六章 眞神ハ見 ざるものゝし
- 第十七章 寺院
- 第十八章 禮拜

第九章	眞神ハ善人ヲ佑クル事
第十章	良心
第十一章	後悔
第十二章	貧人ルウ井
第十三章	父母
第十四章	父
第十五章	母
第十六章	女子ルウ井ズ
第十七章	士官ジヤツク
第十八章	病母

第十九章	兄弟の愛
第二十章	兄弟三人
第二十一章	前章の續
第二十二章	前章の終
第二十三章	近隣を愛する事
第二十四章	仁惠
第二十五章	孤子
第二十六章	ジュリアン
第二十七章	旅客
第二十八章	諸人の必要なる人

第二十九章	善牧師
第三十章	施濟姑娘
第三十一章	報讎
第三十二章	不善の富者
第三十三章	自愛して他を愛せざる事
第三十四章	家内
第三十五章	老
第三十六章	從僕
第三十七章	朋友
第三十八章	恩

第三十九章	老たるミシエール
第四十章	傲慢
第四十一章	各種の職
第四十二章	裁判
第四十三章	罪人
第四十四章	獄
第四十五章	善良方正の人
第四十六章	三萬フヲ
第四十七章	前章の續
第四十八章	奇託を受くる事

第四十九章	欺く人
第五十章	正しい事
第五十一章	前章の續
第五十二章	職業
第五十三章	賢者
第五十四章	牧人
第五十五章	耕夫
第五十六章	兵卒
第五十七章	商人
第五十八章	前章の續

第五十九章	工人
第六十章	營業
第六十一章	魔を使ふといふ事
第六十二章	節儉と時刻を惜むとの事
第六十三章	富貧
第六十四章	前章の續
第六十五章	眞の富者
第六十六章	ナボッツの葡萄園
第六十七章	前途の目的
第六十八章	善人の葬儀

第六十九章 悪人の死

第六十六章 悪人の死

第六十五章 悪人の死

第六十四章 悪人の死

第六十三章 悪人の死

第六十二章 悪人の死

第六十一章 悪人の死

第六十章 悪人の死

第五十九章 悪人の死

第五十八章 悪人の死

江入

訓蒙勸懲雑話

第一章 真神

真神ハ天地宇宙間の萬物を造る者にして大ハ天上の太陽より小ハ草底の昆蟲ニ至るまで凡そ人の目ニ觸るゝ物と觸れざる物との論なく皆此神の造き糸にあらざるハち余太陽の昇るを見るハ其形盛大ニして光り輝き多くの光彩を放てり又暗夜ニ星辰の布き列なれる天を見れば實ニ砂粒の海岸ニあるが如く甚だ數多かり又風

和田順吉

石橋好一

訂

の起ると暴風雨の至るとを聞き時として、雷聲の余が
耳底に響くことあり
余四序の循環を見らば草木春を以て地に萌芽し夏の温
熱を得て舒長蕃茂し後花を開き實を結び秋に至りて
熟せば人之を收めて冬日の間長く穀倉に充て貯蓄とい
汝著意して見よ彼の太陽と星辰と地の豊饒あると草木
の野に生じて花を開き實を結ぶと皆盡く真神の力に因
りて創造し又盡く真神の力に因りて保存するあり嗚呼
我真神其妙力の廣大にして事策の善良あること實に敬
畏せざんばあるべからざ

我真神の標せし位置を見るに山岳は高く平地は低く溪
谷の間は小川を流せしめ諸山より大河を下らしめ且雨
降り露滴りて土地を潤澤あらしむるも皆我真神の爲に
所あり
人類及び諸動物の爲めは草木果蔬を生育して飢寒の禦
となし飢を養ふ麪包渴を止むる葡萄酒も亦もと地より
生産して皆我真神の爲に所あり

第二章 太陽

童子等余に従ひて野の中或は山の上に至り首を昂げて
天の盛大あるを觀よ

太陽ハ東の方ニ現きて火の雲ニ包まると如く漸々ニ
昇りて土地を暖め且豊饒ニするあり
太陽の廣大なる地を過ぐるを觀よ其進むニ變ることあ
く常ニ齊しく常ニ同じくして終ニ暮雲の端ニ傾き隠る
となり
夜間余輩の太陽を見るときを得ざる時も其光輝ハ會て
消ゆることなし余輩ニ其光輝を見ざるときも他國の人民
ハ其光輝を見るあり是き其光輝の絶ゆることなく決し
て消えざる故あり奇なるかを神あるらるる眞神通力の
事業驚くべく貴ぶべく實ニ得て知るべからざるあり

不學無術の人あり太陽及び萬物を生育せし光輝と上地
を豊饒ニする温熱とを知り太陽を眞神として造物の主
なりと思ひ首を俯し膝を屈めて之を禮拜然れども太
陽ハ心と造りしものにて即ち眞神の造る所あり
眞神ニ若し太陽をくんば宇宙晦冥ならんと思ひ太陽を
創造して之ニ出沒すべき地を示し其進行すべき時間を
算へて其時と分時とを定めたり故ニ世界創造の後數百
年を過ぎても太陽ハ眞神の定法ニ從ひて其現るる時間
を限り正しく時と分時とに適合して曾て誤ることなく
童子等太陽ハ汝ハ眞神の妙力の盛大なることを誨ふる

物なり

第三章 植物

汝ハ小樹の生長と其枝葉と花とを見たり汝何ぞ善く之を考へざるや

汝ハ其一枝を折り其一花を摘みて玩物とモ亦何ぞ善く之を考へざるや

童子等姑く汝の意を下して植物ニ感心をべし是モ眞神の事業の一奇を見らば足るなり

寒氣已ニ去り暖風始めて地ニ吹く時葉ヲ包み花を含める嫩芽の自肥也ヲ見るべし

此小き嫩芽ハ甚柔輭にして愛まべし眞神之を殻中ニ包藏せしむ

蕾の開くとき彩色ある花瓣を見ハし花底ニ天然緻密なる鬚心を隠ししハ果物ハ實ニ之より出るなり

花ハ樹木の裝飾と見ゆれども其實ハ鬚心の弱きが爲め之を蓋ふ用をなはなり

花の蓓蕾鬚心等を眞神の愛護するに切なるとも恰も慈母の赤子を保んぞるが如し赤子始めて生るれば寒氣と

猛烈なる空氣とを禦がんが爲めに之を温暖なる襦袢の内ニ包みて保護し眞神の花ニ於けるも一ニ斯の如し

第四章 鳥

一隻の鳥あり叢樹の地より來りて巢を作どり此鳥甚小弱
よして枝より枝と飛び遷るよ一葉の陰に隠れて見えざ
此鳥ハ草芽及び白楊花の纖毛と些少なる羊毫とを拾ひ
集め又之を樹苔と共編み合せて一の巢を作り陰密な
る小枝の上あり
雌鳥此巢中四五又ハ五六の卵を生む其卵を野薔薇の
實よりも小くして雄鳥の羽色の如き斑點あり天然
此微小なる雌鳥ハ何事堪へ忍ぶや二十日の間此巢中
よ止まり動かざして其翼下よ卵を温む時よして小穀粒

を食ひ一滴水を飲まんが爲めよ暫時て巢を離るくと
速よ歸り就くなり
奇なるかな卵ハ母の温熱よて已に殻中よ形を成し自其
嘴よて殻を破り赤裸よして少許の柔軟なる毳毛を被り
る雛となりて其中より出るを見るなり

此小弱なる雛を養ふ者ハ誰ぞ其父と母とが遠く野よ飛
び往きて穀粒を拾ひ歸り雛の嘴を開くを見て之を哺
時至りて生長し羽翼已に成りて其全體を蓋へは獨飛
て食を尋ね或ハ平地よ下りて遊び樂むことを得るあり
童子等汝ハ鳥の苔と羊毫とを以て巢を作るを見雌の翼

下_二卵を温むるを見雛の卵殻を破りて出るを見其父母
の其雛_ニ食を哺むるを見ば皆是_レ真神の所爲なりと考
ふべし_一 斯の如き事を成し得るハ唯真神の_レとして縦合學問才
智_ニ誇る人も地を鑿り石を積む巧力ある者も此一隻の
小鳥だも造り得ること能はざるなり

第五章 世界

世界の宏大よして限界なきものなり
汝が住む家の周圍ある庭園_ニ如何_ニ大なりとも是_レ都
街又ハ村落の一小隅なり

汝が眼_ニ渺茫無邊_ニ見_レ汝が耳_ニ遠く端より端_ニ寺鐘
の聞ゆる程廣大なる都街村落も亦是_レ國中の一小隅な
り
我佛蘭西ハ余輩の廣大_ニして且宏麗ありとむる國_ニあれ
ども亦是_レ地球上の一小隅_ニ過ぎ_レぬ
汝等畫工の景色を描くが如き地球の表を記載せる地圖
を見_レば此圖表_ニ我佛蘭西國_ニ其國の如何ある地位_ニ
あるとを示さん其小きこと恰も橙子の皮面ある一の小
き凸凹の如し
然らば地球の宏大あること實_ニ言ふべ_レら_レ其周圍_ニ

萬零百九十三里ありて上ニ數多の高山及び大海あり其
至廣至大あること豈驚くべきことあらざや
然れども地球も亦唯世界の一小部なり
太陽を見よ地を距ること三千八百九十二萬餘里なり諸
の恒星を見よ太陽より遠きこと十萬倍あり又此恒星を
超えて遠きこと十萬倍ある他の恒星あり
天ハ限界なく實に茫々たる太虚なり
天ニ散布せる恒星ハ悉く皆太陽にて余輩の眼ニハ唯輝
きたる小點の如く見ゆ其距離の遠きと實に驚くべし
此太陽ハ總て余輩の目の達せざる他の世界ニ輝き其世

界を超えて又他の世界あり

嗚呼眞神の事業の盛大あること至妙至奇總て人目の見
ること能はざらん人の了ること能はざる所にして其神
異なること實に測知をべららざらん

第六章

眞神ハ見えざるものなり

人ハ總て眞神の目前ニありて何事も眞神ニ隠すこと能
はざらん眞神の視察ハ普く善惡人の上ニあり
眞神ハ人の心中を度り人の笑談を聞く故に余輩の思慮
する所ハ何事として眞神の知覺せざる事なし
惡をなす者ハ神罰を免るること能はざらん眞神ハよく惡人

の心を知り亦よく悪人の言を聞く故あり
嗚呼我真神地として在さざるハかく所として臨まざる
ハかく余若し天上ニ昇らば真神其所ニ在し深淵ニ下ら
ば亦真神其所ニ在きを見ん人或ハ謂ふ冥晦の時多くハ
物の余を蔽ふこととあらん此時或ハ不善をなすべしと是
を大ニ然らば真神ハ晝夜となく光明ニして照臨し給ふ
あり
人あり不善をなし真神の知らんを恐きて之を己が心底
ニ匿し或ハ冥晦の中ニ事をなして誰れも余を見るもの
あり誰れも余が爲し事を知るものなしと思ふハ譬へ

は猶も陶器の陶匠を輕蔑して余を作りしハ汝ニあらざ
ると云ひ又器物の其工匠ニ向ひて汝も余を知らむと云ふ
が如し豈も愚ならずや
汝も耳を與へし人ハ汝が言を聞かざることを得ず汝も
目を與へし人ハ汝の行を見ざることを得ず汝何ぞ之を
思はざるや

第七章 寺院

祭日の朝天色清朗として紫面花上の曉露猶未だ晞りざ
る頃シヤールと云ふ人其父ニ從ひて村の寺ニ詣りんと
て出行き遙く林麓と數戸の人家とを眺むるに其間ニ遠

寺の鐘樓の高く天と聳ゆるを見たり
寺樓の鐘聲を聞き漸く近づきて之を見ど其里人の美
衣盛飾して祭壇の下に赴く者途に絡繹たり幼男稚女ハ
皆書籍を手で微笑して進み貴家の老人の蒼顔鶴髪な
る杖を扶けらるゝあり母ハ各童兒を携へ童兒ハ母の
側で遊嬉して路傍の花を探り戯れ走るあり
シャルルハ其父と共に寺中に入りて大に静肅せり諸人
も亦其處に群集雜坐し既にして各神前に跪きたり
此時頌歌の聲ありて衆人身を慎み世界の萬物を創造し
萬物の主宰たる眞神を禮拜す

シャルルハ父母の康福を祈念し禮拜經中なる眞神の譽
の條を讀誦し少時よして禮拜終りて各徐々と退散せ
り
シャルルハ父と共に退散せしが幸福多くして天を見野
を見又四序の代謝と草木の榮枯とを見て眞神の巧業の
至大あることを驚感し又衆を愛し人を親しみ善をまじ
惡を戒めて善良有徳なれば必大に悦びあるべきことを
感じ思へり

第八章 禮拜

よく眞神を禮拜すべし是れ眞神ハ汝を有徳に導くべし